

議論の場における「不同意」に関する一考察

—対人配慮の観点から—

王昌(筑波大学大学院)

要 旨

本稿は、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トラスクリプト・音声) 2021年3月版』を用いて、議論の場での「不同意」に見られる日本語の配慮の伝え方を調査するものである。その結果、ストラテジー使用の観点から「間接的な意見表明」「意見の保留」「部分同意」「見せかけの賛成」「理解表明」「冗談」、配慮表現の観点から緩和表現と共感表現が見られた。それぞれの使用回数を比較したところ、「間接的な意見表明」「意見の保留」「見せかけの賛成」の使用が多いことが明らかになった。また、共感表現の使用率が高く、自他の共感を最大限にし、相手を取り込むことによって、配慮を行う日本語の特徴が見て取れる。

キーワード: 「不同意」、議論の場、配慮

1. はじめに

日常会話において、われわれは相手の意見を否定したり、異なる意見を示したりする状況に直面しなければならない。このような食い違いが生じる際に、相手のフェイスをつぶす危険性が高いため、人間関係や場の状況などによって、不同意を表明するかどうかを判断した上で、表明する場合、自分の意思を明確にしなが、相手に不快な思いをさせないためにはどのような話し方が適切なのか、といったことを考慮する必要があると思われる。「不同意」をうまく伝えられなければ、相手に思わぬ印象を与えてしまい、人間関係に摩擦が起きることは十分考えられるため、効果的に自分の意見を伝えると同時に、相手への配慮を示すことはかなり重要である。

そして、議論の場における「不同意」はアサーションを実践する行為の一つであると考えている。平木(2021:23)ではアサーティブを「自分の気持ち、考え、信念などが正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現され、そして、相手が同じように発言することを奨励しようとする」ものと定義している。つまり、アサーションには①対人関係の場面に対応する②自分の気持ちを適切に表現する③相手が表現した考えや気持ちを適切に受け止めるという三つの側面があると言える。従って、「不同意」のコミュニケーションにおいて自分の主張したいことがきちんと伝わるように工夫し、それと同時に相手の考えや気持ちを汲み取り、相手と共に円滑なコミュニケーションを進める姿勢は必要不可欠であり、日本語教育の中でも、それは当然指導が必要な項目になるのではないだろうか。日本語学習者にとって、討論で相手と意見を交わす際には高度なコミュニケーション能力が求められる。議論の場において「不同意」の表明が起こる際の相互理解を促進し、出来る限り誤解や摩擦を軽減させるために、日本語母語話者がどのように配慮を示しながら、「不同意」を表明するかを明らかにする必要があるだろう。

2. 先行研究

「不同意」を表明する際の配慮の示し方について、李（2001）は相手の意見に同意を表す（又は自分の意見のマイナス面を言う）及び中立的な意見が用いられる際の表現を相手配慮型として捉えている。楊（2015）は発話文のモダリティの分析を試み、中国語母語場面と中国人学習者の発話において、モダリティ表現を付加せず、命題のみで断定的に不同意を示す発話が5割近く占め、日本語母語話者との間に大きな差が見られた。また、中国語母語場面と日本語母語場面では、認識のモダリティを最も多く用いるのに対し、中国人学習者は認識のモダリティより、中途終了の発話の生起が多かったと指摘している。それらを踏まえて、配慮表現の形式と機能を総合的に検討する必要があると考えられる。

また、「不同意」に関する先行研究の中、初対面や友人同士の雑談（木山 2005、筒井 2016 など）に注目するものが多く見られているが、議論の場でのコミュニケーションに焦点を当てるものは比較的少ない。さらに、方法論については、仮想の場面（堀田 2017）、制度的場面（本田 1999）、ロールプレイ（梶本 2004）での会話、談話完成テスト（ルンティエラ 2004）のデータが多く、自然会話を扱うものは比較的少ない。

3. 研究目的と研究課題

本稿の目的は議論の場での「不同意」に見られる日本語の配慮の伝え方とその使用傾向を明らかにすることである。具体的には以下の二つの研究課題を設定している。

課題①：議論の場での「不同意」において、配慮を伝える際にどのようなストラテジーが使用されるか。

課題②：議論の場での「不同意」において、どのような配慮表現が共起されるか。それぞれどのような機能を果たしているか。

4. 研究方法

本研究のデータは『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トラスクリプト・音声）2021年版3月版』から、グループ16の大学（院）異性友人同士12組の討論会話を使用する。個別会話情報は表1の通りである。

表1 個別会話情報

会話の通し番号-会話グループ番号-話者記号-話者記号	会話時間	話題
221-16-JFB027-JM028	00:13:42	評価の方法は、試験がいいのか、それともレポートがいいのか
233-16-JFB030-JM031	00:14:57	愛する派か、愛される派か
237-16-JMB008-JF104	00:15:47	田舎に住んだほうがいいか、都会に住んだほうがいいか
213-16-JFB025-JM026	00:19:17	美容整形に賛成か、反対か
241-16-JMB009-JF105	00:13:46	

217-16-JFB026-JM027	00:13:48	情報収集に役立つのは、新聞か、 テレビニュースか
229-16-JFB029-JM030	00:13:04	
249-16-JMB011-JF107	00:13:22	一人暮らしがいいか、 実家暮らしがいいか
257-16-JMB013-JF109	00:15:29	
225-16-JFB028-JM029	00:13:42	仕事は職場環境で選ぶか、給料で選ぶか
245-16-JMB010-JF106	00:18:20	
253-16-JMB012-JF108	00:16:05	

会話の文字化資料より、木山（2005）の定義に従い、前後の文脈を踏まえて、意見に対する「不同意」のやりとりを抽出した。

「不同意」：話し手 S は、聞き手 A が発話した、もしくは信奉していることが前提とされるある命題 P が、真実ではないとみなした場合に不同意し、P ではない命題内容または含意を持つ発話で反応する

意見に対する「不同意」のやりとりから、「不同意」の表明は【前部＋「不同意」発話＋後部】という構造を有することが分かった。その中で、「不同意」発話は「不同意」の意図を示す部分である。前部と後部は必要に応じて「不同意」発話の前後で配慮を示したり、説得の語気を強めたりする部分である。

次に、「不同意」発話、前部、後部に見られる配慮を示すストラテジーをコーディングし、ストラテジーの側面で「配慮の指向性あり」の発話とする。さらに、ストラテジーの側面で「配慮の指向性なし」の発話においても、具体的な言語表現の使用が会話の丁寧さに大きく関わるため、山岡・牧原・小野（2018）が定めた配慮表現の定義に基づき、ストラテジーの側面で「配慮の指向性なし」の「不同意」発話における配慮表現を抽出した。

「配慮表現」：対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮として用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現

5. 調査結果

5.1. 配慮を伝える際のストラテジー使用

「不同意」発話、前部、後部における配慮を示すストラテジーのコーディング結果とそれぞれの使用回数を表 2 に示している

表 2 配慮を示すストラテジーとその使用回数

	ストラテジー	使用回数
「不同意」発話	間接的な意見表明	15
	意見の保留	20
前部	部分同意	5
	見せかけの賛成	17
	理解表明	4
後部	冗談	6

5.1.1. 「不同意」発話におけるストラテジー使用

「不同意」発話において、「間接的な意見表明」「意見の保留」で婉曲的に「不同意」を伝えることができ、それぞれの使用回数はいずれも10回以上を達している。

(1) 「間接的な意見表明」

会話例 i

ライン番号	話者	発話内容
84	JFB029	で、なんかNHKだけ取り残されてるっていうか<笑い><笑い>。
85	JM030	ま、 <u>取り残されてるかどうかは捉え方の問題だけどねー</u> (うん)。

会話例 i では、「不同意」を表明する側の JM030 が「取り残されてるかどうかは捉え方の問題だ」と述べているが、それは「取り残されているかどうかは捉え方の問題なので、私の捉え方ではNHKだけが取り残されているというわけではない」というような意味合いが含まれており、「不同意」の意図を間接的に伝えようとしている。このように、「不同意」の意図を明示するのではなく、間接的に伝えることによって、推論で言外の意味が得られ、相手に配慮を示すことができると思われる。

(2) 「意見の保留」

会話例 ii

ライン番号	話者	発話内容
150	JF105	なんか、男は見かけ駄目でもいくらでも<カバーできる気がするんだけど><>。
151	JMB009	<うん、それ、女の子でもそう><>思うんだけど。
152	JF105	<u>そうかなー?</u> 。

「意見の保留」とは「不同意」の表明において自分の意見を明示せず、一旦保留するストラテジーである。例えば、JF105の「そうかなー」のような発話はあえて独り言の形を取り、自分の意見を保留し、それによって話者の語気を弱めている。従って、「意見の保留」も「不同意」発話において配慮を伝えるストラテジーとして捉えることができる。

5.1.2. 前部におけるストラテジー使用

前部において、「部分同意」「見せかけの賛成」「理解表現」が配慮を示すストラテジーとして使用されている。

(1) 「部分同意」

会話例 iii

ライン番号	話者	発話内容
21	JM030	(前略) 新聞のほうが、より客観的な立場をとっているので(うんうん)、役立つんじゃないかな、というふうに思っています。
22	JFB029	うん、なんか、 <u>新聞のほうが確かに情報量が多い、絶対。</u>
23	JFB029	うん、なんだろ、正しいことを言ってるってのもあるし、うん、それはすごい思うけど。
24	JFB029	なんだろうな、テレビ、は一‘わ’、なんかその情報に入りこむ第1歩になりやすいつつうか、うん。

「部分同意」とは「不同意」を示す側がかわりに相手の意見の正当性を主張する戦略である。会話例 iii において、JM030 が先行発話で新聞の情報量について言及していないにもかかわらず、JFB029 が前部で「新聞のほうが確かに情報量が多い」と述べ、一旦相手の立場に立ち、情報収集における新聞のメリットを主張している。相手の意見を部分的に賛同することによって、丁寧さを加えることができると思われる。

(2) 「見せかけの賛成」

会話例 iv

ライン番号	話者	発話内容
5	JM029	違う違う、だって、たいてい(うん)、入る前なんてどんな人おるか わかんねーべ。
6	JFB028	まー、 <u>そうだけど</u> さー、(だしょ)でもそれでもー、給料よければ良 い‘いい’って話なんでしょ？。

「見せかけの賛成」とは「不同意」の前部で相手への賛成を先に示す戦略である。相手の意見や考え方に対する全否定を直接的にぶつける場合、相手のメンツをつぶす可能性も同時に高くなってしまうため、その前に「そうだけど」あるいは「相手の発話の復唱/まとめ+けど」といった前置き表現を付け加えると、実質の全否定による人間関係を脅かす度合いが軽減されることになるだろう。

また、表 2 で示した戦略の使用回数に関しても、前部の戦略使用において「見せかけの賛成」が一番多いことが分かった。「見せかけの賛成」として使用される言語表現「そうだけど」あるいは「相手の発話の復唱/まとめ+けど」は慣習性が高く、「不同意」の前部の一種の定型表現として捉えることができると考えられる。

(3) 「理解表明」

会話例 v

ライン番号	話者	発話内容
257	JFB025	うん、ね、自然体が1番いい、てこと、やろ??、(まー)「JM026姓」は。
258	JM026	まーね。
259	JFB025	うん、 <u>それで反対やもんね</u> 、あたしは人がやるぶんにはいいかなって意味で認めてあげれるっていう、そういう世間の1人の目として、賛成なのかもしれん、<自分はやらないよって感じやけど><{}>。

「理解表明」とは相手の意見に対して賛同できないが、理解はできるという意思を示す戦略である。JFB025が「不同意」を表明する際に、「それで反対やもんね」と前置きし、「不同意」を表明される側の意見への理解を示すことによって、良好な人間関係を維持できると思われる。

5.1.3. 後部における戦略使用

前部に比べて、後部における戦略の種類と用例が少なく、本研究で確認できたのは「冗談」のみである。

(1) 「冗談」

会話例 vi

ライン番号	話者	発話内容
262	JFB025	なんか、それで親身になって考えてない部分もあるかもしれんけど、ちよっと、けっこう、さめた客観的な目として、賛成やってんけど。
263	JM026	そだね。
264	JFB025	まー、 <u>でも「JM026姓」のその反省[「反対」の言い間違いか]の意見はいいよね、心温まるものがくあるよね</u> <{}><笑いながら>。

「冗談」は「不同意」を表明する際に、相手との親密さを表すポジティブ・ポライトネス戦略（Brown&Levinson 1987）であり、笑いとの共起も多く見られる。そのため、後部の戦略使用において「不同意」を示す側は相手との関係を積極的に維持しようとする傾向が明らかになった。本調査の協力者の人間関係は友人同士に限定しているので、それが上述の調査結果の一因でもあると考えられる。

5.2. 配慮表現の使用

戦略の側面で「配慮の指向性なし」の「不同意」発話に見られた配慮表現の機

能分類とそれぞれの使用回数を表3に示している。

表3 「配慮の指向性なし」の「不同意」発話における配慮表現とその使用回数

機能分類	ポライトネス/ 配慮表現の原理	言語表現	使用回数 (割合)	
緩和表現	他者への非難を 最小限にせよ 自他の意見相違 を最小限にせよ	～気がする	3 (3.5%)	24 (28.2%)
		～かもしれない	5 (5.9%)	
		～かな (と思う)	6 (7.1%)	
		言いさし文	10 (11.8%)	
共感表現	自他の共感を最 大限にせよ	～ではないか	33 (38.8%)	61 (71.8%)
		～だろう	17 (20%)	
		～よね	11 (12.9%)	

Leech (1983)、山岡・牧原・小野 (2018) に基づき、配慮表現の機能は緩和表現と共感表現に分類することができる。

緩和表現のポライトネス/配慮表現の原理は「他者への非難を最小限にせよ」「自他の意見相違を最小限にせよ」であり、その言語表現は文末の「～気がする」「～かもしれない」「～かな (と思う)」言いさし文が見られた。

- ①JM027: 《沈黙 3 秒》て一か、なんか、新聞さ、あの一、主張が出るじゃん、なんかこう、右寄りだったり、左寄りだったり、テレビとかさ、そん一なにないような気がくする>{<}。
(ライン番号: 174)
- ②JF106: (前略) 職場環境、選んだほうが、結局は稼げるかもね。(ライン番号: 165)
- ③JFB025: (前略) 自分の心がそれで晴れ晴れすれば、美容整形はいいんじゃないかな、と思う。
(ライン番号: 99)
- ④JM029: 人が良ければ…。(ライン番号: 174)

相手と異なる意見を示す時に、このような文末表現を使用することによって、出来る限り不一致を回避することができ、対人関係配慮には有効である。①「～気がする」③「～かな (と思う)」はもともと思考を表す動詞であり、②「～かもしれない」の原義は可能性判断であり、これらの表現はいずれも使用の慣習化によって発話を和らげる緩和表現へと拡張し、「不同意」発話で相手に配慮を示すことができる。④言いさし文も同様に、明白の内容を省略する文末形式から、「不同意」の表明における慣習化された配慮表現として定着していると言える。

また、共感表現のポライトネス/配慮表現の原理は「自他の共感を最大限にせよ」である。その言語表現は文末の「～ではないか」「～だろう」「～よね」が見られた。

- ⑤JM027: しかもこう、なんかさ、なんだそれって思っても一、もう1回見れないじゃん。
(ライン番号: 211)

⑥JF105：それは、親が、急に変化するのが嫌なんでしょ?、(後略) (ライン番号：9)

⑦JMB009：それはまた、偏見だよね。 (ライン番号：139)

緩和表現と異なり、共感表現は自分の発話を和らげるのではなく、相手の共感を喚起することによって、配慮を伝えるものである。否定疑問文である⑤「～ではないか」と相手の考えを確かめる上昇調の⑥「だろう」及び⑦「よね」は、表現の慣習化を経て、共感を高める機能を果たすことになり、相手に同意を求める配慮表現となっていると思われる。

最後に、表3で示している配慮表現の使用傾向をまとめると、共感表現「～ではないか」の使用回数が一番多く、共感表現の全体的な使用回数(使用率)が61(71.8%)となり、緩和表現と比べて明らかに多いことが分かった。つまり、配慮を示す際に、日本語母語話者は比較的共感表現を好み、自他の共感を最大限にし、自身の発話で相手を取り込もうとする傾向が見て取れる。

6. まとめと今後の課題

本稿は『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2021年3月版』のデータを用いて、議論の場での「不同意」に見られる配慮の伝え方について考察を行ってきた。ストラテジー使用について、「不同意」発話と前部に見られる配慮を伝えるストラテジーのバリエーションが豊富で、「不同意」発話では「間接的な意見表明」「意見の保留」の使用が多く、前部では「見せかけの賛成」が慣習的な定型表現として多用されている。配慮表現に関しては、緩和表現と共感表現の機能が確認され、共感表現の使用頻度が比較的に高く、「不同意」を示す側が自他の共感を最大限にすることによって、配慮を行う傾向が明らかになった。今後の課題としては、日本語と他言語の比較対照を行うこと、談話レベルの分析を加えること、人間関係による言語表現の使い分けを検証することなどが挙げられる。

会話データ

宇佐美まゆみ監修(2021)『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2021年3月版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」、サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」(リーダー:宇佐美まゆみ)

参考文献

宇佐美まゆみ「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2019年改訂版」

<<https://ninjal-usamilab.info/lab/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf>>, 2021年1月10日参照

木山幸子(2005)『『BTS』による多言語話し言葉コーパス:日本語会話1(日本語母語話者同士の会話)』を用いた研究:日本語の雑談における不同意の様相:会話教育への示唆(自然

会話分析と会話教育：統語的モジュール作成への模索)』『言語情報学研究報告 6』東京外国語大学 165-182

梶本総子 (2004) 「提案に対する反対の伝え方：親しい友人同士の会話データをもとにして (特集 伝え方の諸相)」『日本語学 23(10)』明治書院 22-33

筒井佐代 (2016) 「評価の対立による対人関係の構築：友人同士の雑談の分析」村田和代・井出里咲子 (編)『雑談の美学：言語研究からの再考』ひつじ書房

平木典子 (2021)『アサーション・トレーニング：さわやかな「自己表現」のために』日本・精神技術研究所

堀田智子 (2017) 「中国人日本語学習者の「不同意」行為：ストラテジー使用における語用論的転移の可能性」『国際文化研究=Journal of International Cultural Studies 23』東北大学国際文化学会 95-106

本田厚子 (1999) 「日本のテレビ討論に見る対立緩和のルール (特集 ディスコース研究の射程--具体的言語実践をどう捉えるか)」『言語 28 (1)』大修館書店 58-64

山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2018)『新版・日本語語用論入門：コミュニケーション理論から見た日本語』明治書院

楊虹 (2015) 「話し合いにおける不同意表明発話のモダリティ」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報 46』鹿児島県立短期大学地域研究所 87-102

李善雅 (2001) 「<研究論文>議論の場における言語行動：日本語母語話者と韓国人学習者の相違」『日本語教育 111』日本語教育学会 36-45

ルンティエラ ワンウィモン (2004) 「タイ人日本語学習者の「提案に対する断り」表現における語用論的転移：タイ語と日本語の発話パターンの比較から」『日本語教育 121』日本語教育学会 46-55

Brown, P. & Levison, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.

Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman.

(王昌、筑波大学大学院博士後期課程、wangchang0903@gmail.com)